

Olympic

オリンピック教育

Vol.12 2023/04-2024/03

Education



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

第 12 巻の刊行に寄せて	真田 久 ... 2
---------------------	------------

研究・活動報告

東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2023 年度）	宮崎 明世 ... 3
The 1st Online session of the OSRCs Network	大林 太朗 ... 8

実践報告

附属小学校	山崎 和人 ... 9
附属中学校	秋山 和輝 ... 11
附属高等学校	鮫島 康太 ... 14
附属駒場中・高等学校	横尾 智治 ... 16
附属坂戸高等学校	野村 拓也 ... 18
附属視覚特別支援学校	鈴木 隆将、山本 夏幹 ... 19
附属聴覚特別支援学校	荒川 郁朗 ... 21
附属大塚特別支援学校	宇佐美太郎 ... 23
附属桐が丘特別支援学校	寒河江 核 ... 27
附属久里浜特別支援学校	遠藤 佑一 ... 30

2023 年度における各附属学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の特徴の一つは、附属学校同士の交流といえるでしょう。

例えば、附属桐が丘特別支援学校と附属坂戸高校との交流学习においては、ユニバーサルスポーツを、個々の発達段階や個別の指導計画に基づく課題を考慮して、2 人組のペアで学習が進められました。ユニバーサルスポーツを企画する際に、両校の生徒が必要なルールや参加方法の工夫について意見を出し合い、共通理解を図りながら創られていったようです。

また、附属視覚特別支援学校と附属駒場高校との交流授業では、生徒同士のペアでタンデム（2 人乗り自転車）の乗車体験を行い、ペダルが連動しているので、自然と会話が生まれ協力し合う姿が見られたと報告されています。「普段は体験できない速度と風を体感できた」、「アイマスクをしてストーカー（後席者）として走行し、見えない世界を体験したことが、パイロット（前席者）でペアに声掛けする際に活きた」という生徒の感想から、双方にとって学びと充実した時間になったことが伺えます。

さらに附属久里浜附属学校では、自閉症の子供たちは人形に対して高い興味・関心をもつ傾向があるという仮説のもと、競技会のマスコットを通して、オリンピック・パラリンピックに興味関心を持つような手立てを考えて成果を出しています。マスコットには大会の理念や特徴が込められているので、それらも十分伝えることができると思われます。

一方附属中学校では、キンボールやマイナースポーツの体験から、正規のルールでは競技の楽しさを味わうことができないと気づき、ルールやコート、人数を修正し、多くの人が楽しめるようにする工夫がみられました。

上記のような附属学校の取り組みは、スポーツ庁が 2022 年に発表した第 3 期スポーツ基本計画の中で、「社会情勢や個人人の置かれた状況に応じて、既存のスポーツの枠組みや考え方のみにとらわれることなく、それらを不断に柔軟に見直し・改善し、最も適切・有効な、あるいは個々の状況等に柔軟に応じた方法やルールを考え出したり、創り出したりするといった、スポーツを「つくる / はぐくむ」という観点から、新たに必要になると考えられる。」ということに込めるものといえるでしょう。これは東京 2020 大会のレガシーとしても重要な方向性といえます。

本年 2024 年はパリ 2024 大会が開催されます。“Games wide open” のスローガンのもと、オリンピックの開会式でのパレードはセーヌ川、パラリンピックはシャンゼリゼ通りで行われます。スポーツによる世界のつながりや多様性ととも、環境に配慮した大会が特徴のようです。競技施設の 95% は既存のまたは仮設を使用し、観客のペットボトル持ち込みは禁止されます。このような大会から私たちはいろいろと学ぶことができるでしょう。今後もオリンピック・パラリンピック教育が深化されていくことを期待したいと思います。

東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2023 年度）

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム・筑波大学体育系 宮崎 明世

I. はじめに

東京 2020 オリンピック・パラリンピックが開催されてから、早くも 2 年が経過し、2024 年度には次のパリ大会が開催される。東京 2020 大会に向けて、全国各地で進められたオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育と示す）について、大会後の教育活動はどの程度行われているのだろうか。また、継続されているとしたら、どのような形で定着することが可能なのだろうか。2023 年度版の本誌において、2022 年度に行った調査結果について報告した。大会が残したレガシーを明らかにするためにも、大会後のオリ・パラ教育の実態について継続的に調査する必要がある。また、教育の成果が表れるには時間の経過が必要であると考えられることから、大会の成果や影響についても同様に継続的な調査が必要である。本研究では、東京 2020 大会後の学校におけるオリ・パラ教育の実態と大会による影響を明らかにすることを目的として、昨年度に続いて調査を行った。2023 年度に行った調査結果を、以下の通り報告する。

II. 方法

1. 対象

本調査では、東京 2020 大会に向けて展開された、スポーツ庁の全国オリンピック・パラリンピック・ムーブメント展開事業に参加した自治体のうち、2022 年度に対象とした A 県、B 県、C 県に新たに D 県を加えた 4 県の公立小・中・高・特別支援学校を対象とした。

前年度から継続対象となった A 県の回答数は 280 校で、全公立学校の 35.4%であった。B 県の回答数は 238 校で全体の 37.2%、C 県の回答数は 42 校で全体の 8.2%であった。新たに対象とした D 県は、東北地方に位置し、2016 年度と早い時期から事業に参加した。大会に向けて推進校を増やし、大会開催年度には 45 校が推進校に指定された。回答数は 287 校で回収率は 41.1%であった。2022 年度調査では A 県が 466 校（57.4%）、B 県が 401 校（62.0%）、C 県が 179 校（34.5%）から回答があったことから、すべての件において回答数が大幅に減少した。

対象とした各地域の校種の内訳を表 1 に示した。すべての対象について、小学校が全体の半数以上を占め、次いで中学校、高等学校の順であった。

表 1. 対象地域の回答校種の内訳

	A県		B県		C県		D県		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
小学校	172	62.5	133	55.9	23	54.8	166	57.8	494	58.3
中学校	81	29.5	65	27.3	13	31.0	85	29.6	244	28.8
義務教育学校	4	1.5	4	1.7	0	0.0	3	1.0	11	1.3
高等学校	12	4.4	32	13.4	4	9.5	20	7.0	68	8.0
中等教育学校	1	0.4							1	0.1
特別支援学校	10	3.6	4	1.7	2	4.8	13	4.5	29	3.4
	280		238		42		287		847	

2. 調査期間とデータの収集

調査は 2023 年 5 月～7 月に実施した。昨年度と同様に、各県の教育委員会を通して調査を依頼し、Google Form を用いてオンラインにて調査を行った。質問項目は、オリ・パラ教育の実態として、2021 年度まで（大会前）、2022 年度（大会後）にオリ・パラ教育を実践したかどうか、2023 年度の教育活動の有無と実施した場合はその内容、実施しなかった場合はその理由、オリ・パラ教育の継続のために必要な支援等を尋ねた。また、オリ・パラ教育の影響として、大会開催以降の児童生徒の変化、学校の取り組みの変化、地域や教員間の変化などについての質問を、昨年度と同様に設定した。

Ⅲ. 結果と考察

1. オリ・パラ教育の実践について（表2、図1）

大会が開催された2021年度、大会後の2022年度、2023年度にオリ・パラ教育を行ったかどうかについて尋ねた。2023年度の調査は前年度と比較して早い時期に実施したため、「未定」の選択肢を設けた。その結果、A県42.1%、B県39.1%、C県38.1%、D県40.1%が「行った（予定がある）」と回答し、調査時に「未定」はA県33.6%、B県32.4%、C県42.9%、D県20.2%であった。全体の傾向を見ると、自治体によって差はあるものの、2021年度は6割前後の学校が教育活動を実施していたが、2022年度には5割前後、2023年度は4割前後と時間を追って実施率が低下していた。しかしながら、前述の通り、2023年度は「未定」の回答が2割から4割におよび、実際には調査後に実施した可能性もある。

表2. オリ・パラ教育の実施率

		2021		2022		2023	
		数	%	数	%	数	%
A県	行った	174	62.1	143	51.1	118	42.1
	行っていない	106	37.9	137	48.9	68	24.3
	未定					94	33.6
B県	行った	126	52.9	121	50.8	93	39.1
	行っていない	112	47.1	117	49.2	68	28.6
	未定					77	32.4
C県	行った	25	59.5	20	47.6	16	38.1
	行っていない	17	40.5	22	52.4	8	19.0
	未定					18	42.9
D県	行った	188	65.5	142	49.5	115	40.1
	行っていない	99	34.5	145	50.5	114	39.7
	未定					58	20.2
合計	行った	513	60.6	426	50.3	342	40.4
	行っていない	334	39.4	421	49.7	258	30.5
	未定					247	29.2

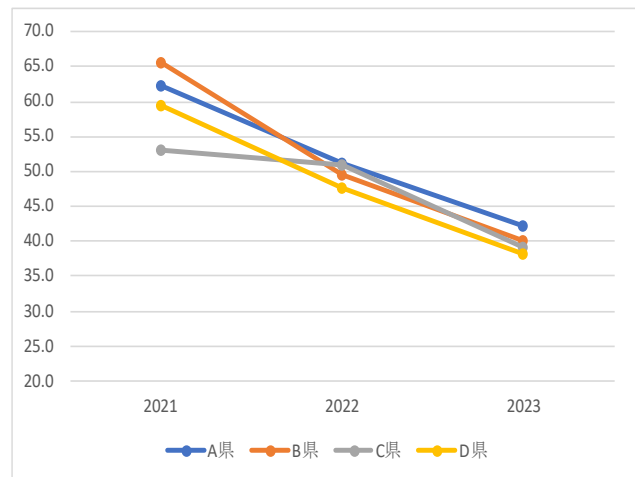


図1. オリ・パラ教育の実施率の推移

2. 今年度（2023）のオリ・パラ教育の活動内容（表3）

今年度教育活動を行った学校に対して、具体的な活動内容を尋ねた。全体を通して、最も多かったのは「授業」で、体育・体育理論での実施が最も多く、次に道徳、さらに国語、社会などの授業における活用があった。活動全体の46.2%が授業における教材としての活用であった。次に、パラスポーツを中心とした「体験」が多く行われており、中でもボッチャはその他のパラスポーツを合わせた数と同程度の実践があった。障害そのものやスポーツ体験と合わせて、活動全体の32.7%を占めた。「学習」に関する活動が活動全体の21.3%で、その内訳は文化・歴史、価値、大会の種目に関すること、パラスポーツや障害者理解に関することなどであった。これら3つのカテゴリーが多くを占めていたが、大会まででは多く行われていたアスリートなどによる「講演」は5%、学校行事が4.1%などであった。

大会前までにはアスリートなどによる講演等が多く行われていたが、大会後には保健体育を中心としたさまざまな教科における教材としての活用が行われていた。体育における活動はもちろんのこと、体育理論での扱い、さらに道徳の教材として、価値を学ぶ教育活動が多く行われていた。教育活動の継続のためには教育課程の中に位置付けることが重要と考えられるが、これらの教科の教材として定着しやすいことが明らかとなった。今回の調査では「総合的な学習の時間」での活用はほとんど見られなかったことも特徴と言える。

3. 今年度（2023年度）オリ・パラ教育を実践しない理由（表4）

今年度オリ・パラ教育を実践しないと回答した学校に対して、その理由について尋ねた。D県以外の地域に共通して最も多かった回答は、「時間の確保が困難」（優先順位が低い、他にやるべきことがある）で、合計は37.6%であった。D県で最も多かったのは、「教育課程に位置付けられていない」ですべての地域の合計は25.6%であった。それ以外にはC県以外に上げられた「オリンピックイヤーでない」（関心が薄い、必要性を感じない）の合計が15.1%で、さらに「教材がない」、「教科教育で扱う」、「教員の知識不足」などの回答があった。

表3. 2023年度の活動内容

カテゴリー	内容	A県(n=118)		B県(n=93)		C県(n=16)		D県(n=115)		合計		カテゴリー合計	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
授業	体育理論、体育	35	29.7	21	22.6	4	25.0	19	16.5	79	23.1	158	46.2
	道徳	14	11.9	10	10.8			17	14.8	41	12.0		
	国語、社会、保健、外国語、福祉、ポッチャ	17	14.4			3	18.8	18	15.7	38	11.1		
体験	パラスポーツ、ブラインドサッカー、車いすバスケ	14	11.9	25	26.9	4	25.0	10	8.7	53	15.5	112	32.7
	ポッチャ	12	10.2	22	23.7			16	13.9	50	14.6		
	障害、スポーツ、福祉			4	4.3			5	4.3	9	2.6		
学習	文化・歴史、種目、価値、関わり	22	18.6	10	10.8	2	12.5	12	10.4	46	13.5	73	21.3
	パラ、福祉、障がい者理解	18	15.3					9	7.8	27	7.9		
講演	パラアスリート、オリンピック、異校種	4	3.4	8	8.6			5	4.3	17	5.0	17	5.0
学校行事	パラスポーツ、PTA、生徒会	4	3.4	5	5.4			5	4.3	14	4.1	14	4.1
日常生活	聖火、挨拶、掲示、給食	4	3.4			2	12.5			6	1.8	6	1.8
あすチャレ				3	3.2	1	6.3			4	1.2	4	1.2
その他	集会、クラブ活動、大会参加	2	1.7	2	2.2			3	2.6	7	2.0	7	2.0

昨年度の調査に続いて、時間の確保が困難であることが最も多く、大会までにオリ・パラ教育にあてられていた時間が他の活動にとって代わっている現実が明らかとなった。また、教育課程（年間計画、教育課程）に位置付けられていないとの回答については、先述した活動内容の結果と合わせて、教育課程の中で教材として扱える内容が継続的に行われることが明らかになった。オリンピックイヤーでないから実施しないという回答もあり、オリ・パラ教育は大会に向けて一時的に行われるものではなく、普遍的に行うことができるものであるという理解が普及していないことも明らかとなった。有効な教育内容、教育手段であることの理解が大会に向けた活動の中で定着しなかったともいえる。教材不足や指導法がわからないといった回答もあり、教材の普及が不十分であること、大会終了後時間がたつにつれて、新たな教材の開発も必要であると考えられる。一方、「教科教育で扱う」という回答が複数あったことは、「オリ・パラ教育」が何を指すかの定義が理解されていないことを示しており、次年度の調査ではその定義が理解されていなくても実態がつかめるような質問の仕方を検討する必要がある。

表4. オリ・パラ教育を実践しない理由

カテゴリー	内容	A県(n=68)		B県(n=68)		C県(n=8)		D県(n=114)		合計	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
時間の確保が困難	優先順位が低い、他にやるべきことがある	23	33.8	36	52.9	5	62.5	33	28.9	97	37.6
教育課程に位置付けられていない	教育課程、年間計画、学校行事	13	19.1	7	10.3	2	25.0	44	38.6	66	25.6
オリンピックイヤーでない	関心が薄い、必要性を感じない	12	17.6	8	11.8			19	16.7	39	15.1
教材がない	過去の事例がない	3	4.4	4	5.9	2	25.0	4	3.5	13	5.0
教科教育で扱う	体育、総合			5	7.4	2	25.0	3	2.6	10	3.9
教員の知識不足	指導法が分からない、詳しい教員がいない	3	4.4							3	1.2
その他	すでに一定の成果を得た、負担が大きい、予算がない、用具がない、全校で取り組むのは難しい、担任に一任	3	4.4	5	7.4			2	1.8	10	3.9

4. 必要な支援（表5）

オリ・パラ教育を継続するために必要な支援について尋ねた。すべての自治体に共通して最も多かった回答は、「教材・資料・情報の提供」（映像・資料、事例、情報など）で全体の合計が29.9%であった。次に「人材の確保」（講師の派遣、人的支援）が22.7%であった。さらに、「広報・周知・啓発活動」、「用具・予算の確保」、「教育課程への位置づけ」、「時間の確保」などの回答があった。教材・資料・情報を求める声が多かったが、先述した通り、大会終了から時間がたつにつれて情報の更新が必要と考えられる。特に2024年度はパリ大会開催年であることから、新たな情報が提供されることで教育活動の継続につながる可能性がある。一方で情報共有の手段については、東京大会前のような共有システムが大会後の現在では存在しないことから、喫緊の課題である。

表5. オリ・パラ教育を継続するために必要な支援（上位抜粋）

カテゴリー	内容	A県		B県		C県		D県		合計	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
教材・資料・情報の提供	映像、教材、資料	101	36.1	46	19.3	8	19.0	55	19.2	253	29.9
	事例の紹介			6	2.5	3	7.1	16	5.6		
	情報提供			9	3.8			9	3.1		
人材の確保	講師・人材の派遣	50	17.9	50	21.0	8	19.0	60	20.9	192	22.7
	人的支援			4	1.7	3	7.1	17	5.9		
広報・周知・啓発活動	意義、メディア、主旨の共有	25	8.9	13	5.5	5	11.9	23	8.0	66	7.8
用具・予算の確保		13	4.6	34	14.3	2	4.8	16	5.6	65	7.7
教育課程への位置づけ	教科書、教科内容との関連	22	7.9	15	6.3	4	9.5	18	6.3	59	7.0
時間の確保		9	3.2	20	8.4	2	4.8	12	4.2	43	5.1

4. オリ・パラ教育の影響

4-1. 児童生徒への影響

東京2020大会の開催以降に、児童生徒に何か変化があったかどうか尋ねた。変化が「あった」と回答したのはA県44.6%、B県27.3%、C県26.2%、D県43.2%、「なかった」はA県12.1%、B県11.8%、C県11.9%、D県8.4%、「わからない」はA県43.2%、B県60.9%、C県61.9%、D県48.4%であった（表6）。2つの自治体では4割程度、残りの2つの自治体では3割弱が児童生徒の変化を感じていたが、いずれの自治体も「わからない」が最も多かった。昨年度は自治体による差はあまりなかったが、今年度は自治体による違いが認められた。回答数も減少していることから単純に比較することはできないが、影響の有無は自治体、学校によってその受け止め方はさまざまであることがうかがえる。

児童生徒に変化が「あった」と回答した学校に対して、どのような変化があったかを尋ねた。各自治体に共通して最も多かったのは、オリ・パラそのもの、スポーツ、外国等に対する「興味・関心が高まった」という回答で、変化があったと回答した学校のうちA県68.8%、B県46.2%、C県54.5%、D県64.5%がこの回答であった。次に、スポーツやパラリンピック、障がい者に関する「知識・理解が深まった」がA県15.2%、B県26.2%、C県9.1%、D県11.3%であった。そのほかには、尊敬、あきらめない心、勇気などの「態度の変容」、「スポーツへの参加」、「話題にすることが多くなった」などがあつた。内容については、昨年度の調査結果と大きな違いはなく、すべての地域において、オリ・パラやスポーツへの興味・関心の高まりが最も大きな変化であることが認められた。スポーツ参加やスポーツへの参加意欲を高めたことも変化として挙げられた。

表6. 児童への影響

	A県		B県		C県		D県		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
あった	125	44.6	65	27.3	11	26.2	124	43.2	325	38.4
なかった	34	12.1	28	11.8	5	11.9	24	8.4	91	10.7
わからない	121	43.2	145	60.9	26	61.9	139	48.4	431	50.9
合計	287		280		238		42		847	

4-2. 学校の取り組みへの影響

大会開催以降に、学校の取り組みに変化があったかどうか尋ねたところ、「あった」と回答したのはA県17.9%、B県24.8%、C県33.3%、D県27.7%であった（表7）。2割を切る自治体から、3割を超える自治体があつたが、総じて児童生徒の変化よりも低い割合であった。

学校の取り組みに影響があつたと回答した学校に対して、どのような変化があつたかを尋ねた。最も多かったのは「新しいスポーツの導入」で、ボッチャを含むパラスポーツを体育や総合的な学習の時間に取り入れたという回答が、合計で58.7%あつた。続いて運動会・体育祭、PTAや特別活動などの「学校行事」は合計で21.9%がこの回答であった。さらに、共生社会や国際理解などの知識・理解が進んだこと、特別支援学校や異学年間の交流、用具の充実などが挙げられた。大会後2年がたっても授業や学校行事での活用は継続しており、先述した活動内容のきっかけを裏付けるものであつた。自治体によっては、公民館などで用具を購入しており、時間がたっても共有でき、活動につながることも示された。

表7. 学校の取り組みへの影響

	A県		B県		C県		D県		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
あった	50	17.9	59	24.8	14	33.3	78	27.2	201	23.7
なかった	230	82.1	179	75.2	28	66.7	209	72.8	646	76.3
合計	280		238		42		287		847	

4-3. 教員間や地域との関わりへの影響

大会開催以降に、教員間や地域との関わりに変化があったかどうか尋ねたところ、「あった」と回答したのはA県18.6%、B県17.2%、C県26.2%、D県23.7%であった。いずれの自治体も2割前後が、変化があったと回答したが、この割合は児童生徒よりも低く、学校の取り組みよりもさらに低い割合であることは昨年度の調査と同様であった（表8）。

教員間や地域との関わりに変化があったと回答した学校に対して、どのような変化があったかを尋ねた。最も多かったのは、話題の共有、教員の関心などの「関心の高まり」で合計すると29.1%がこの回答を挙げた。次に地域の活動への参加、コミュニケーションの促進などの「地域との交流・協力」で、合計で25.0%であった。さらに、「教師間コミュニケーション」、「多様性や価値、地域のスポーツなどに対する「理解」が深まったこと、地域や学校間、海外との「交流の機会」となったこと、などが挙げられた。オリ・パラが地域や教員の間で共通の話題となり、コミュニケーションの促進に役立ち、理解が深まったことが伺えた。オリ・パラ教育活動による地域や教員間の関わりへの影響があったことは今年度の調査でも明らかとなった。

表8. 教員間や地域とのかかわりへの影響

	A県		B県		C県		D県		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
あった	52	18.6	41	17.2	11	26.2	68	23.7	172	20.3
なかった	228	81.4	197	82.8	31	73.8	219	76.3	675	79.7
合計	280		238		42		287		847	

IV. まとめ

本調査では、東京2020大会に向けたオリ・パラ教育の大会終了2年後の実態と、教育活動が残した影響について明らかにすることを目的とした。対象自治体を1つ増やして調査を実施したが、各自治体の回答率自体が前年度と比較して大きく減少した。また、大会が開催された2021年度から、時間がたつにつれてオリ・パラ教育活動を実践している割合が減少していることも明らかとなった。教育活動を行わない理由として、時間の確保が困難であることは昨年度の調査と同様多く挙げられ、大会終了から時間がたつにつれて、新たな情報や教材の提供が必要であることも示唆された。また、オリ・パラ教育の影響として、児童生徒や、学校の取り組み、地域や教員間への影響があったことが明らかになった。

今後も継続的な調査を行う必要があると考えているが、さらなる回答率の低下が懸念される。また、対象である公立学校の教員の異動によって、大会開催当時の実態が不明確になり、回答の精度にも影響する可能性がある。さらに、今年度の結果からは、オリ・パラ教育の定義が共有されていないことが示唆され、実際の実施率や活動内容が明らかにできるような質問の仕方を工夫する必要がある。

2024年度にはパリ大会が開催される。オリンピック・パラリンピックの話題がメディアで多く取り上げられ、東京2020大会の話題も扱われることから、学校教育における教育活動を活性化させるチャンスである。教育活動に対して、東京2020大会に向けて行われたような政府組織や自治体、企業等からの援助は見込めないことから、東京2020大会の経験を活かした効果的な取り組みの工夫が必要である。大会の終了後もレガシーとして学校教育に根付かせるために、本調査の結果を活かすとともに、さらなる継続的な調査を行って、大会後の実態と教育活動の影響を明らかにすることが求められる。

The 1st Online session of the OSRCs Network

筑波大学体育系 大林 太朗

CORE は、国際オリンピック委員会（IOC）のオリンピックスタディセンター（OSC）の学術ネットワークに参画する教育・研究センターである。（2024年4月現在で71団体）。4年に一回、夏季オリンピックのホスト国で学術会議（OSRCs コロキウム）を実施するが、その間をつなぐ小規模なオンラインコロキウムの第一回が下記の要領で実施された。

日時：2023年11月16日（木）22時00分～24時00分（日本時間）

場所：オンライン（IOC側が設定したZoom会議）

主催：The Olympic Studies Centre

目的：特に「教育活動」に焦点化し、オリンピック・スタディーズに関するイニシアティブの創設、組織化、定着化に向けた情報を共有し議論を行うこと。

プログラム：

話題提供（4センターより、各12分程度）

- ① Course on Olympic Values for undergraduate students (as part of the Chair on Olympic Studies and Sport) – Centro Universitario de Estudios e Investigación Olímpicos - Escuela Nacional del Deporte, Colombia - By Rodrigo Bravo Baeza
- ② M.A. Olympic Studies - Olympic Studies Centre - German Sport University Cologne, Germany – By Stephan Wassong
- ③ Master of Arts in Sport and Olympic Studies - Centre for Olympic Research and Education - University of Tsukuba, Japan – By Taro Obayashi
- ④ MOOC Course “The Olympic Games and the Media” - The UAB Olympic and Sport Studies Centre - Universitat Autònoma de Barcelona, Spain) – By Emilio Fernández Peña

それぞれのプレゼンテーションにおけるコンテンツ

- ・ How the initiative was born?
- ・ What is the purpose / vision?
- ・ How was it developed and integrated in the programmes of your university?
- ・ When did the initiative start? Length, frequency…
- ・ Who are the beneficiaries? How many participants and profile?

参加報告：大林はスピーカーの一人として登壇し、COREにおける教育（附属学校、大学、大学院におけるオリンピック・パラリンピック教育）の状況について報告を行った。東京2020に際してのSFT事業を通じたTIAS（つくば国際スポーツアカデミー、スポーツ・オリンピック学学位プログラム）についても説明を行った。参加者からは大会後のレガシーとしての事業の継続性、また「運動会」に係る実践面の関心を得た。

2024年度には対面形式でのコロキウム本大会が控えており、大林の方ではその準備委員会（steering committee）の一端を務めている。前回大会のホスト組織としての役割を果たしつつ、東京2020後も継続されているオリンピック・パラリンピック教育の実践について積極的に情報発信を試みたいと考えている。

走り幅跳びの学習では、自己記録更新に焦点を当てることもできますが、ある程度技能の高まるとなかなか記録が伸びにくくなります。また、個人の記録の伸びだけを学習課題にすると子ども同士での関わり合いが少なくなることが予想されます。

そこで、子供たちのモチベーションを維持しながら、班の全員の力を合わせて目標の記録を更新するような学習を設定することが大切であると考えます。

今回は、オリンピック・パラリンピック（以下、オリ・パラ）と一人1台端末とを融合させた単元について紹介させていただきます。

1. 単元名

みんなで超えよう走り幅跳び〇〇記録

2. 目標

自分に合った助走距離から、片足で踏み切り、両足で着地できるようにする。

3. 単元計画（20分×6回程度）と大まかな単元の流れ

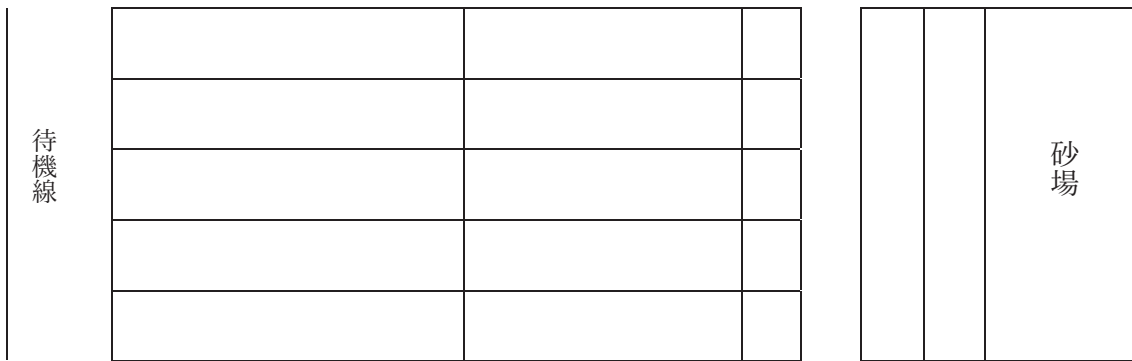
本実践では、1単位時間に2教材を行う組み合わせ型学習をとっているため、1回の授業を20分として展開することができるように構成しています。

1	2	3	4	5	6
1. オリエンテーション ・場の準備、学習の仕方を知る。 2. ピタッと止まろう ゴム踏み跳び。 ・5歩程度の助走距離から、片足踏切を行い、ゴムの上に両足着地する。	1. 距離を伸びして ゴム踏み跳び ・目標のゴムの距離を伸ばしてゴム踏み跳びを行う。 ・場合によっては、助走の距離を伸ばす。	1. 遠くに跳ぼう川跳び ・目標ゴムを設定し、超えることができるようにする。 ・着地の姿勢や空中姿勢に注意して跳ぶ。	1. 自分の記録を測定しよう ・測定の仕方を知る。 ・試技を数回行い、自分の記録を測定する。	1. 班で挑戦する記録を決めよう。 ・走り幅跳びの記録を調べ、どの記録に挑戦するかを決める。 2. 助走距離を考えよう。 ・自分に合った助走距離を決めて練習する。	1. 〇〇記録を超えよう。 ・班のメンバーの最高記録を合計し、目標の記録を超えることを目指して挑戦する。

- ①目標の位置にゴムを張った川跳びを行い、走り幅跳びの基礎的な動きを身につけます。
- ②各自の走り幅跳びの記録を測定します。
- ③測定した走り幅跳びの記録を参考に、3人もしくは4人の班それぞれごとに目標とする走り幅跳びの記録を決めます。
- ④走り幅跳びの記録（オリンピック記録、世界記録、ジュニア記録等）を調べ、目標記録を設定します。
- ⑤走り幅跳びを行い、班の全員の記録を合計し、自分たちが設定した記録と比べます。
- ⑥記録を向上させるために、よい走り幅跳びの仕方考えます。

4. 場の設定

- ・スタートする線とは別に待機線を設けます。
- ・助走の距離5mラインと10mラインを用意します。
- ・単元の前半は砂場にゴムを張ります。（記録を測定する時には使用しません。）
- ・砂場の端にコーンを置きます。
- ・コーンの位置から、試技をした子が次の子の走り幅跳びの様子を観察します。
- ・兄弟班を作り、試技をする班と測定・判定をする班に分かれて行います。



5. オリパラの観点から

走り幅跳びという競技を、トップ選手の記録という視点から考えることで、より身近になると考えます。トップ選手がどれくらい跳んでいるのかという記録を知ることで、助走距離はどうなっているのか、空中姿勢はどうなっているのか、といった走り幅跳びの知識・技能に関わる部分への関心を広げることができるでしょう。また、走り高跳びやハードル走といった、他の陸上競技への興味・関心が高まることも考えられます。

6. ICTの使用ポイント

その1：フォームの比較 (ipad)

単元の1時間目と6時間目のフォームの比較を行うことができます。撮影した動画を見比べたり、単元終了後に「この時の自分にどんなアドバイスをするか」を考えさせたりすることができます。特に、学習指導要領では、「知識・技能」という枠組みで評価をすることから、走り幅跳びのポイントをどの程度理解することができたかという、知識を評価に活用することができます。また、毎時間撮影タイムを設けることで、自分のフォームがどのように変わってきたのかを見ることができます。

その2：調べ学習の効率化

体育の限られた授業時間の中では、できるだけ運動に従事する時間（運動学習時間）を十分に確保したいと考えます。なので、自分たちが挑戦する記録については、あらかじめ調べておき、児童が活用するアプリ（学びポケット）でグループごとに相談しておくことが有効であると考えます。



オリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属中学校 秋山 和輝

1. 背景

本校では継続的なオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）の推進を図り、昨年度の実践の積み上げになるような取組みを計画した。具体的には鳥居選手の継続的な講演開催、新しいスポーツの体験活動の保証が挙げられる。今年度の本校のオリパラ教育を授業実践、総合学習、特別活動の3つに整理して活動を報告する。

2. 目的

本校のオリパラ教育の活動報告を目的とした。そのための各取組みを以下のように設定した。

- (1) 保健体育科の授業における実践事例
- (2) 総合学習の取組み
- (3) 特別活動での取組み

3. 実践報告

(1) 保健体育科の授業における実践事例

本校では計画的、継続的にオリパラ教育を実践している。今年度は1年生の体育理論の単元において「運動やスポーツの多様な楽しみ方」として生徒が今まで体験したことがないモルックを体験する授業を実践した。

①モルック体験（第1学年）

モルックとは1～12まで書かれた木製のピンをモルックという棒を投げ、倒れた木製ピンの数字や本数をカウントして競うスポーツである。生徒に馴染みはないものの、障がいの有無、性別や身体能力、技能差に関わらず楽しむことができるスポーツとして近年注目を浴びている。

第1学年の体育理論単元でスポーツの必要性や楽しさ、多様な関わり方、多様な楽しみ方を座学で学習した後にだれでも、だれとでも楽しむことができるモルックを素材に体験活動を実施した。倒した木製のピンや本数によってカウントされる得点は異なり、チームや個人の課題を共有し、作戦を立てる姿からは生徒自らがスポーツの楽しさに気が付いている様子で生涯スポーツに寄与する可能性を秘めていた。特に狙ったピンを倒した際には歓声と落胆の声（相手チーム）が入り乱れる光景は印象的であった。

②ブラインドサッカーとゴールボール体験（第3学年）

3年生のサッカー単元中にブラインドサッカーを体験する機会を意図的に設定した。足でボールを扱う難しさはサッカーの単元で学習しながらも、さらにアイマスクをした状態でボールをコントロールすることの難しさを体感した。さらに障害理解やパラスポーツの理解の点で発展的にゴールボールを体験した。アイマスクをした状態でゴールボールを止めるのは至難の業でありながらゴールボールの鈴の音に耳を澄ませ、仲間と声をかけ合いながら全身で守ろうと横になっている姿は印象的であった。



写真1. ゴールボール体験

(2) 総合学習の取組み

また第2学年の総合学習でスポーツを捉え直すことをテーマに探求活動を進めた。生徒が知っているスポーツのほとんどは近代スポーツの種目であり、そのスポーツはメディア等で視聴している機会などが大きく影響を受けていると考える。スポーツとはそもそも何なのか、様々なスポーツが存在することを理解すること、体験すること、学びを深めることを狙いとした。

実践報告 ▶

①キンボール体験

生徒のスポーツ観（総合時間内ではスポーツについての概念）がいかにかに狭義なものであるのかを体感・体験させるためにキンボールを用いた。キンボールという種目を知っている生徒はおらず、キンボールという物に触れたこともない生徒たちは直径1.2mあるキンボールを目の前にすると驚きとワクワクが止まらない笑顔が見られた。誰でも楽しめるスポーツであると同時に対戦チーム同士の駆け引きや戦術が内在しており、とても白熱した試合が繰り広げられていた。



写真2. キンボール体験の様子

②マイナースポーツ体験

生徒が主体的に学びを深めるために中学校の保健体育授業で取り扱っていない4つの種目について調べ学習と体験活動を行った。4つの種目はタグラグビー、フィールドホッケー、インディアカ、シッティングバレーである。調べ学習では各グループでタブレットを使用して種目の形式やルール、起源について調べた。ただ調べるだけではなく、調べた内容を他のグループに説明すること、理解を促すことを心掛けた活動を行った。翌週に調べたことを実際に総合コース内のメンバーと一緒に行う活動を行った。正規ルールでは競技の楽しさを味わうことができないと気が付き、ルールやコート、人数を修正して行う種目について知らない人でも楽しめるように工夫がみられた。



写真3. フィールドホッケーの様子



写真4. シッティングバレーの様子

③NTC 見学（第2学年、第3学年）

フィールドワークとして味の素ナショナルトレーニングセンターに伺った。トップアスリートのトレーニング場所の見学だけでなく、射撃で使用する銃器に触らせてもらい、壁に記されている走り高跳びの世界記録を目にする機会となり、ツアーガイドの方の説明で生徒たちからは驚きの声が出ていた。聞いたことはある、知っていることでもそこに体験が入ることで生きた知識として生徒の中に残ることを実感した活動となった。



写真5. 走り高跳び世界記録



写真6. NTC 前での集合写真

(3) 特別活動での取り組み

本校ではオリンピックやパラリンピアンに講演いただく機会を継続的に設定してきた。今年度は全校生徒約 600 名を対象に平山相太さん（当時筑波大学大学院生）、学年ごと（約 200 名ずつ）に鳥居健人選手（ブラインドサッカー日本代表）を招聘した。

①平山相太さんのご講演

オリンピックでのご経験やプロサッカー選手時代の生活のお話など普段は聞くことができない内容を生徒に分かりやすく講演していただいた。高校サッカーの名門国見高校在籍時の話やプロ生活での葛藤や挫折、その時の助けになった話など生徒でも悩んだ時の気持ちの捉え方や考え方など実生活でも活かされる話が多くみられた。一方的な講義形式の講演ではなく、生徒との対話を大事にしながら最後の質疑応答の時間ではたくさんの生徒から質問が寄せられた。どの質問に関しても丁寧にお答えいただいて生徒はトップアスリートと触れ合う良い機会となった。

②鳥居健人選手のご講演

昨年度に講演いただいた鳥居選手に継続的にご講演いただいた。オリパラ教育で講演していただく際に事前学習や事後学習などを行わず一過性のイベント的活動になってしまいがちである。もちろん登壇いただく講師の方のご都合や学校内の事情があると思うが、講演を契機に学びを深めるためには継続的に学校のオリパラ教育に関わっていただく必要性を感じる。生徒の活動の充実を図ることを目的に本校では今年度も鳥居選手を招聘し、講演していただいた。

第 1 学年は鳥居選手の体験談をもとに障害理解を深めるための 1 時間となった。第 2 学年は学級委員の生徒と対話形式で会を進め、事前に学年生徒約 200 人から集約した質問をもとにインタビュー形式で行われた。第 2 学年、第 3 学年では実際に生徒同士でアイマスクをして、ブラインドサッカーに触れる機会があり、充実した時間を過ごした。さらに生徒からのリクエストで鳥居選手が実際にドリブルを披露した際には歓声が沸き起こった。普段の講演会では見られない感動と喜びは生徒の学習の深まりの一助となったに違いない。



写真 7. 対話形式の様子



写真 8. 実技講演

4. 成果と課題

昨年度の課題となっていた継続的な講演は実施することができた。講演に至るまでは様々な方々のご尽力で実現した。教師の願いや学習としてのねらいはあるが、生徒がどのように学びを深めたのか等の成果を十分に検討するまでには至らなかった。そのため次年度は生徒が学んだことや感じたことをアンケートとして集約するなどしっかりと記録として残しておく必要がある。

5. 今後の予定

各学年の総合学習や HRH と連携して、継続的かつ計画的な取り組みを行っていきたいと思う。講演では事前・事後学習はもちろんのこと、スポーツの価値教育など包括的なスポーツのもつ魅力や価値について生徒とともに考える機会を意図的に設定していきたい。

附属高校の取り組み

附属高等学校 鮫島 康太

1. 体育実技において

オリンピズムに関連する内容を日常の教育活動の中に盛り込んでいくという考え方のもと、各種目では様々な取り組みを行っている。

今年度は、一年生男子「陸上競技」の単元において「トップスピードで渡すバトンパス」という、日本代表チームが得意とするバトンパスを用いたリレーの授業などを実施した。また、高校二年男子「柔道」の単元では、国際柔道連盟が提唱する「CLEAN JUDO」の考え方や全日本ジュニアチームの取り組みを紹介し、柔道に内在する礼の作法や考え方が文化として世界に広まっていることを示した。次年度は「バスケットボール」単元において、東京オリンピック正式種目に採用された「3 x 3」を用いた授業展開を検討中である。体力の向上や技能の習熟に加えて、さらに多くの要素を盛り込んだ授業づくりと発信を心がけていきたい。

2. 体育理論などの授業

保健・体育理論の授業では、オリンピック・パラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。特に経済や政治との関りについて生徒の関心も高かったように感じる。これらの問題は保健体育科だけではなく他教科でも取り上げられ、生徒は様々な観点からオリンピック・パラリンピックをとらえる良い機会となった。来年度は2024パリオリンピック・パラリンピックであるが、今のところ生徒の関心はあまり高くない様子であった。

また、今年度はパラ柔道選手を招聘し「視覚障がい者柔道」の紹介や、社会生活でのサポート方法の解説を行ってもらった。生徒たちは、目が不自由な方の困り感が理解できたことが意義深く感じ、街中で困っていたら声をかけてみたいと感想を述べていた。

3. 筑波スタディとしての取り組み（総合的な探究の時間）

「筑波スタディ」では、一年次ではリサーチクエスションの吟味や研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習し予備研究を行う。二年次で課題研究を行い、最終的には論文を作成するというものである。二年次の大まかな流れは、4月にオリエンテーション、5月に研究テーマの焦点化を行い本格的な研究活動に入っていく。毎年、オリンピック・パラリンピックやスポーツ全般に関連することが研究題材として複数挙がってきている。

4. 学校行事として（スポーツ大会）

オリンピズムの根本原則に、「友情を育みながら競争的なスポーツに倫理的に取り組む」という内容がある。その実践の場としては、本校で行っている「スポーツ大会」が挙げられる。

コロナ禍では学年ごとの実施だったが、昨年度から全校生徒同日「一斉開催」となった。今年度も昨年と同様「バレーボール」「フットサル」「ドッジボール」が球技大会形式で1日半をかけて行われた。2日目の午後には運動会形式のクラス対抗種目で競った。一学年が「二人三脚リレー」、二学年が「クラス全員リレー」、三学年は「玉入れ」であった。これらに加えて1組～6組をそれぞれのチームとして、その中から選手を集め「代表リレー」を行った。

他学年の生徒を応援したり、他人から応援される喜びや楽しみを感じる表情、互いにアドバイスし合う姿や健闘をたたえ合う姿はオリンピズムを体現していると言える。



【写真①】 スポーツ大会開会式での準備体操の様子



【写真②】 ボート部の対学習院高等科との定期戦におけるエール交換の様子

5. 日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムへの参加

2年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」は世界中から集まった高校生同士がスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリンピズムを学ぶ。「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム」は「国際 YF」が開催されない年にも実施され、国内の高校生がオリンピックの理念やオリンピックムーブメントの現状を学び、社会課題を解決するヒントを探る。このイベントには本校からも毎年参加者が出ている。

6. その他

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリンピズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまでも受け継がれている。校内での日常活動に加えて、他校との伝統ある部活動定期戦なども実施されている。

2021年のIOC総会にて、オリンピックのモットーである「Faster Higher Stronger」に「Together」が加わった。スポーツを通してオリンピズムを理解する過程で、他者の存在なしにしてそれを叶えることはできない。コロナ禍を経たからこそ、他者の大切さを再認識できるはずである。次年度は「Together」に焦点を当てたオリンピック教育の実践を検討したい。

駒場でパラリンピアン田口亜希さんの講演会を開催

附属駒場中・高等学校 横尾 智治

高校2年生の課題研究の授業で、田口亜希氏を呼んで講演会を開催しました。田口氏はロンドン、アテネ、北京のパラリンピックに出場し、2020東京オリンピックパラリンピックでも招致活動にて中心的な役割を果たし、メディアでも解説をしている方です。東京2020大会の選手村副村長として快適な居住空間の創出にも尽力されました。

講演会ではご自身のこと、エアライフルのこと、今回のオリンピックパラリンピックの舞台裏など多岐にわたる話題を1時間以上お話いただきました。生徒たちはエアライフルの的の小ささに驚いたり、車いすの方が社会生活の中で感じる不便さなどの話を真剣に聞いていました。会終了後はオリンピックパラリンピックの聖火トーチの実物を見て喜んでいました。

生徒の感想は以下の通りです。

- ・やはり障害やパラリンピックなどという話題となれば自分の知らない事はいくつか発見できるだろうと思っておりましたが、田口さんの実体験に基づくお話は現実的で文章では伝わらぬ障害の側面を感じることが出来ました。具体的には脊髄の損傷による障害は後天的なもので尚且つ25歳までは健常であったこと、それによるショックの大きさは想像を絶するものがありましたし、はたまた僕たちの様な五体満足の子でもいつ障害を負うか分からぬという事実から障害者と自分の違いが髪一重であることを実感しました。また、聖火ランナーをやった身からすると、オリンピック、パラリンピックという行事は18年生きてきて他のどの類の行事よりも人の繋がりや協力の大切さを感じられるものでしたが、田口さんのバリアフリー、アクセシビリティに関する細部にわたる工夫の数々にはとても驚き、より一層東京オリンピックパラリンピックへの感謝というかおもしろい入れが深まりました。(特に柱の部分のガードをつけたこととメダルのはきは印象的)
- 自分が別に特段努力すべきとまでいかないですが、体の不自由な方の為に出来ることをさりげなく意識できるダンディーな大人になれたらなあと思います。ありがとうございました！
- ・田口さんのパラリンピックの話もとても興味深かったが個人的には最初の胸椎4番5番より下が使えなくなってしまったというところの話がとても心に響いた。それまで英語をがんばったり就職活動がんばってきてやっと夢であったクルーになれたのにその最中歩けなくなってしまうのは想像しても想像しきれない。そこで不貞腐れるのではなく1個1個できることを増やしていこうと前を向けるところもとても尊敬した。自分の身の回りにも言い出せないだけの障害者の方はいるだろうし自分もこれからなにか発症する可能性は多いにあるので理解を深めていきたい。





また同じく高校2年生の課題研究の授業でオリンピックミュージアムを訪問しました。

生徒の感想は以下の通りです。

- ・ オリンピックの歴史や魅力を再確認できた。また、オリンピックと勝負できる体験ブースもあり、楽しみながら学ぶことができた。
- ・ 実物を見られたのは非常に刺激的だった。体験ブースも楽しかった。外国人が話しかけてくれてコミュニケーションを取れたのがオリンピックと役割が似ているなどと思った。
- ・ 世界情勢(政治など)とオリンピックとの関わりが様々あって興味深かった。

上記のように今年度はオリンピックミュージアムを訪問したり、またパラリンピアンの方の田口亜希さんの講演会を実施できる貴重な機会を得られましたが、生徒たちは想像力を働かせて理解しようとし競技の魅力を感じたりとオリンピック・パラリンピックについて考えることができました。



附属坂戸高等学校の取り組み

附属坂戸高等学校 野村 拓也

1. はじめに

本校では毎年、体育科と福祉科の協働型授業として、体育の視点と福祉の視点から学んだことをそれぞれ出し合い、障害のあるなしに関わらずスポーツの楽しさを味わえるユニバーサルスポーツの開発に取り組んでいる。本年も附属大塚特別支援学校と附属桐が丘特別支援学校との交流会を実施して、開発したユニバーサルスポーツを一緒に楽しんだ。

2. 開発したユニバーサルスポーツの概要

【スポーツ名】

おかあさんといっしょ

【ルール】

各チーム2人ペア（兄弟）になって、各チームから1ペアずつレーンに分かれて並ぶ。兄弟はおかあさんから出されるお題を聞き、レーンの後ろにある「はてなボックス」から必要なものを持ってきて自チームのメンバーと協力しながらお題のクリアを目指す。最初にお題をクリアすることができた兄弟は1マス進み、4マス目まで進むことができたなら1ポイントゲットできる。制限時間内にたくさんポイントをゲットできたチームの勝ちとなる。

【お題例】

- ・タオルを4枚たたみなさい！
- ・洋服を3着ハンガーにかけなさい！
- ・さいころをふって2人で同じ目を出しなさい！



3. 交流会を経験した生徒の変化

以下、交流会を経験した生徒の感想で印象的だったものを紹介する。

「最初はどこまで補助したり手伝ったりしていいかわからなくてお互い遠慮がちだったけど、スポーツに熱中するうちに自然と打ち解けられた。」

実際に初めに実施した附属大塚特別支援学校との交流会の冒頭では、本校の生徒たちは交流に消極的であった。これはユニバーサルスポーツを開発する中で、交流する附属学校の生徒がどんなことができないかに目を向けていたことが原因であると考えられる。相手のできないことに目を向けることで、無意識のうちに自分と障害のある人との間に境界線をつくってしまった。しかし、交流会を通して障害のあるなしに関わらず味わえるスポーツの楽しさを同じルール・同じ空間で体験することで、対等なプレイヤーとしてお互い関わり合うことができ、無意識のうちにつくってしまった境界線をなくすことができた。生徒たちがスポーツの持つ社会的な価値を体験的に実感できた有意義な交流会となった。

附属視覚特別支援学校オリンピック・パラリンピック教育実践報告

附属視覚特別支援学校 鈴木 隆将、山本 夏幹

1. 活動報告

令和5年度の実践は主に①小学部児童向け水泳教室②中学部3年生向けブラインドサッカー交流③附属駒場との交流事業の3つに取り組んだ。

2. パラアスリートとの交流を通じて学ぶ、スポーツがうまくなる「コツ」

本校のオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）では初の試みとなる「水泳」を題材とした交流を実践した。講師として卒業生で東京オリンピック・金メダリストの木村敬一選手（高等部普通科卒）と東京オリンピックで悲願の初出場を果たした石浦智美選手（高等部普通科卒）を招いた。交流は二部構成とし、前半に選手お二人との対話形式による交流、後半は実際にプールに入って泳ぎのレッスンを行った。木村選手の金メダルを一人一人じっくりと観察する時間もあり、メダルの重さや質感を触って感動する様子が印象的だった。泳ぎのレッスンでは基本となる水中姿勢を一人一人に丁寧に指導していただき、最後にリレー形式でパラリンピアン達と一緒に泳ぐことができた。児童たちからは「メダルを触ったのは初めてだったので、重いことが分かって、いい経験になりました」「10数えてから木村選手がスタートしたのに、（木村選手が）先に着いたのに驚きました」という感想も見られ、普段の授業では味わうことのできない特別な体験をすることができた。



写真左が木村敬一選手



写真中央が石浦智美選手

中学部では3年間の体育実技の中でブラインドサッカーに取り組んでおり、最終学年となる3年生ではまとめとして、今年度はオリパラ教育も兼ねた形で本格的なブラインドサッカーを体験する授業を展開した。特別授業に向け、実際の競技でも使用されるサイドフェンスを使用した実技を行ったり、試合形式（二方向に攻守がある形）を行ってゴール型の特徴の一つである「ボールの奪い合いから発生する攻守の切り替え」を体験し、ブラインドサッカーの楽しさをさらに感じさせることができた。今回、講師として男子日本代表で卒業生の鳥居健人選手（高等部専攻科鍼灸手技療法科卒）をお招きし、トップカテゴリーで活躍する選手の身体感覚を学んだり、プレーを間近で見たり、実際に対戦して肌で感じることができ、ブラインドサッカーの理解を深めることができた。生徒たちからは「声の方向に正確に行ってきれいにシュートを決められていたので自分も見習いたいと思いました」「ドリブルがとてもうまくて人一倍努力して練習しているからこそ上手なんだと実感し、自分も何かに向かって頑張っていきたいと思いました」とあり、卓越した技能の背景には多くの時間と熱意に裏打ちされたものであることを理解できた様子だった。



写真上段中央が鳥居健人選手



生徒2人と対戦する鳥居健人選手

3. 附属駒場高校との交流事業 ～タンデム乗車体験会を通じて～

高等部1・2学年対象に、附属駒場高校（以下駒場）との交流事業の一環で、タンデム（2人乗り自転車）乗車体験会を日本パラサイクリング連盟に協力いただき実施した。体験会前半はパラサイクリング連盟関係者と生徒ペアで、後半は生徒同士のペアでタンデムに挑戦した。走行中は、前後のペダルが連動して動くので、息を合わせるためにも自然と会話が生まれていた。また互いに協力し、風を切る気持ちよさを共有することで交流がさらに深まり笑顔で走行する様子が見られた。現役で国際大会でも活躍されている木村和平選手（楽天ソシオビジネス株式会社所属）も体験会に参加いただいた。「普段は体験できない速度と風を体感できた」や「今度は大きな公園や自然の中を走ってみたい」という附属視覚の生徒からの感想、「アイマスクをしてストーカー（後席者）として走行し、見えない世界を体験したことが、パイロット（前席者）でペアに声掛けする際に活きた」という駒場生徒の感想から、双方にとって充実した時間になったことが伺える。



競技用タンデムを触察する生徒



駒場、視覚生徒ペアでタンデム乗車

4. 高等部普通科「アスリート育成プログラム」の取り組み

その他の取り組みとして令和5年度から本校高等部普通科生徒を対象に、将来のパラアスリート育成を目的とした「アスリート育成プログラム」を発足し、令和5年度に10名の生徒を認定し、活動を継続的に行った。令和5年度時点では、競技種目は水泳とフロアバレーボールに限られるが、それぞれの競技種目の特性に応じた練習の機会創出や大会への積極的な参加などに繋げることができた。今後はさまざまな競技種目で、本プログラムを活用しながらアスリートとしての資質を向上させ、将来世界で活躍する多くの人材の育成に寄与していきたい。

令和5年度附属聴覚特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の取組

附属聴覚特別支援学校 荒川 郁朗

1. はじめに

本校で、ここ数年継続的に行っている「車いすバスケットボール」と「ラート運動」の体験を今年度も実施した。この二つの種目は、ともに専用の用具を用いるため、いただいている予算の大きな部分が、その運搬費に充てられてきている。今年度「車いすバスケットボール」は高等部普通科の生徒で、「ラート運動」は中学部の全学年生徒対象で実施した。

2. 車いすバスケットボール

12月15日（木）、高等部普通科1年生男女24名を対象に、車いすバスケットボール体験会を行った。以前は講師として、現役の車いすバスケットボール選手に来ていただいていたが、昨年度、講師の方の日程的な事情により本校体育科教員の主導で体験会を実施した。その内容としても体験会としては満足できるものであったため、予算の効率的な執行ということも考慮して、今年度も昨年度同様の形で行った。

対象となる生徒たちは、当日を迎えるまでに授業の中で「車いすの歴史」や「車いすの種類」などについて事前学習をしており、当日は競技用車いすの特徴を実物に触れながら確認する様子が見られた。体験は車いす10台、授業2コマ分という限られた用具と時間の中で、車いすの操作から、ランニングシュート、試合という流れで行った。車いすの操作は、単純な前進・後退、その場での回転、マーカーコーンの間をすり抜けるスラロームなどを行った。その後、ゴールに向かって進みながらパスを受け、そのままシュートするランニングシュートを行った。この練習では車いすでゴールに向かう角度やスピードが大切になるが、頭で理解できていてもイメージ通り実際に操作することの難しさを感じる生徒が多く見られた。試合は男女合同4チームに分けて行った。車いすの操作や、座った状態でのパスやシュートなど、日頃の動きとは違う体験となり、得点はなかなか入らなかったが、多くの生徒が、楽しんで参加することができた。

車いすについての事前学習、また車いすバスケットボールの実技体験を終えた生徒から、以下のような感想が挙げられた。車いすバスケットボールにはもちろん、通常的車いすについても興味・関心が高まったことが伺える。以下に一部を紹介する。

- ・競技用車いすは軽量で動かしやすかったが、真つすぐに進むことが難しく感じた。
- ・下半身が使えないことで、上半身も思うような動きができず、シュートが難しかった。
- ・道の段差や凸凹、坂道などは乗る人はもちろん、押す人も大変だということがわかった。
- ・エレベーター内では、スペースが狭く方向転換の難しさを感じた。



写真1. 前進、後退の練習の様子



写真2. 試合の様子

3. ラート運動

1月19日（金）、中学部生徒全員を対象に、ラート運動体験会を行った。

本校で8年目を迎えたこの体験会には、講師に筑波技術大学の天野和彦准教授をお招きし、指導に当たっていただいた。ラート運動は、日頃、経験できない姿勢や視界を体験できることから、本校生徒たちの多くがとても楽しみにしている体験であり、

長く継続することができている。

ラートは、例年同様に筑波技術大学保健科学部から借用した。当日は初めての体験となる1年生が2時間、2、3年生は前年の経験があるため、1時間ずつで行った。1年生は天野先生の模範演技を見せていただき、イメージを作った。体験ではラートの縁に乗って重心を真ん中に置きながら歩くトレーニングから始めて、足を固定して横に揺らす動作、そして側転、後転、前転という順番で実技指導が行われた。各回転で大きなポイントとなる、目線、姿勢、ひじの使い方を意識してそれぞれの回転を体験した。その際、身長別で2～3名のグループを作り交代で行った。落下防止用のベルトの着脱については、安全面を考慮して必ず教員が行うようにした。側転、後転、前転ができるようになると、2～4回転を連続で回る段階に進む。最終的には3回転する間に後転→側転→前転と各回転を織り交ぜた連続技までできるようになる生徒が多かった。

2、3年生は、1時間という短い時間の中での体験となったが、これまでの経験から、すぐに感覚を取り戻し、連続技や捻りを加えた新技に取り組むことができた生徒もいた。過去2年間、恐怖心から回転できなかった3年生が2名いたが、3回目の体験で回転することができ、とても喜んでした。

限られた時間の中での体験のため、時間内にできるようにならない生徒もおり、毎年継続して行っていることにより、全員がそれぞれの段階に合った達成感を味わうことができたと感じた。

体験後のアンケートから、次のような生徒の感想が挙げられた。

- ・「ラートはただ乗って回転するだけでなく、自分の思うように向きを変えられるのが楽しいです。」
- ・「年に1回だけでなく、学期に1回くらいやりたいです。」
- ・「回転するのがとても怖かったけど、できた時の達成感がとてもよかった。」
- ・「サーカスがやっついそうなことで、とても面白かったです。」
- ・「1時間は短いです。せめて2時間にはできませんか。(2年生)」
- ・「昨年も体験していたので、昨年よりもスムーズにできました。とても楽しくなりました。」
- ・「せっかくの機会なのに手のけがで参加できず、悲しかったです」

4. おわりに

今年度も、車いすバスケットボールとラート運動の体験会を行うことができた。毎年継続的に実施してきたこともあり、本校体育科教員も指導を行うことができるようになってきている。用具の予約に関わる日程調整、用具の運搬に関わる費用などの条件がそろえば、今後も実施していけたらと考えている。



写真3. ラート後転の様子

知的障害特別支援学校中学部における、オリンピックとの交流・講演会を中心とした社会科・保健体育科における教科横断的な学び

附属大塚特別支援学校 宇佐美 太郎

1. 対象と目標（ねらい）

(1) 対象

知的障害のある中学部に在籍する生徒

(2) 目標（ねらい）

本校に在籍する生徒は全員、知的障害児・者である。

知的障害という障害の特性上、家庭・学校以外の場所に一人、もしくは友達同士で出かけることは少なく、幼児児童生徒の行動範囲が学校と家庭（最近では放課後デイサービスなどに通っている生徒も多い）のみに限られてしまうことが多い。また、興味関心が偏っていたり、ルールの理解が難しい幼児児童生徒が多く、自ら進んでスポーツに取り組んだり、情報を得たりすることも難しい。そのため健常者と比較すると、スポーツをしたり触れたりする機会は圧倒的に少なく、スポーツに関する知識も少ないと言える。

そこで、オリンピックイヤーである2024年に向けて、オリンピック・パラリンピック教育を通して、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を高めることを目標に、中学部で実践を行った。

2. 内容

(1) 教科横断的な学び

これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を進めていくことが課題となることは既知のことである。本校ではカリキュラムマネジメント及び学校研究の柱の一つとして「教科横断的な学び」を掲げ実践をおこなっている。中学部におけるオリンピック・パラリンピック教育においても、教科横断的な学びという視点をもとに、カリキュラムマネジメントの中で複数の教科について検討を行ってきた。

中学部では以前より本校独自のアダプテッドスポーツとして「タグ柔道」という競技を保健体育科の授業で取り扱ってきた。「タグ柔道」とはタグラグビーのように腰に2本のタグをつけ、タグを取り合うことでその勝敗を決するという競技である。前述したように障害の特性上、柔道の複雑な技やルールを理解することが難しいことや、生まれつき頸椎に障害があることが多く運動制限のあるダウン症候群の生徒も在籍していたことから、柔道に代わるスポーツとして本校で考案されたアダプテッドスポーツである。

この「タグ柔道」をオリンピック・パラリンピック教育の軸として検討していく過程で、縁あって東京オリンピック柔道81キログラム級金メダリストでパリオリンピックへの出場が決まっている永瀬貴規選手との繋がりをもつことができ、オリパラ教育研究センター形成費用を用いて交流並びに講演会を実施することとなった。

今回、永瀬選手との交流・講演会を実施するにあたっては、本校の生徒で実際に柔道をやったことがある生徒もおらず、生徒全員が柔道を行うことも難しいため、交流・講演会の内容を保健体育に限らず教科横断的な視点から検討した。

過去、タグ柔道の取り組みを行う中で、2016年度に本校の近くにある講道館と連携させていただく機会を得ることができた。それ以来、年に3回ほど講道館の柔道場を使用させていただき、タグ柔道の指導を行うとともに、講道館の先生方からも指導をいただいている。講道館の先生方の指導の中で、競技としては柔道とタグ柔道は違うが、礼法や精神は同じであるとお話をいただいた。そこで、礼法や精神という内容であれば、柔道の選手である永瀬選手とも話題を共有できるのではと考えた。

「柔道」そして「タグ柔道」というコンテンツを持って教科横断的な学びとオリンピック・パラリンピック教育の目標に沿った交流・講演会を実現するため、保健体育の授業においては「礼法」をキーワードに「礼法を守ってタグ柔道をしよう!」という単元を設定した。また、社会科の授業「残したいもの・伝えたいこと」という単元においては柔道の精神、基本理念を作り上げた「嘉納治五郎」を題材とした学習を行い、まとめたことを交流・講演会の中で発表することとした。そしてより学習効果を高めるために保健体育科、社会科を同時期に実施するとともに、全ての学習を終えたタイミングで交流・講演会を実施する流れとした。

(2) 保健体育科「礼法を守ってタグ柔道をしよう」

学習形態は中学部1～3年生全員（18名）で行われた。全授業時数は12時間で令和5年10月から12月にかけて実施された。実際にタグ柔道を競技として行う前に、左前や帯の締め方など正しい道着の着方や立礼、座礼、右起左座など基本的な礼儀作法の学習を行った。また、本単元を実施している期間に前述した講道館へ行き、3回の校外学習を行った。実際に柔道着を持参し、講道館の柔道場でタグ柔道の練習をするとともに、講道館の師範の方から柔道の礼儀作法や受け身、投げ技などをご指導いただいた。特に礼儀作法については本校教員に柔道経験者が少ないこともあり、より専門的な立場の方からご指導をいただくことで、その意味から理念までしっかりと学習することができた。知的障害という特性上全てを理解できたわけではないが、生徒たちにとって学校外の指導者から指導をいただくことは貴重な機会であり、かつ緊張感をもって学習に取り組めたことで、学習効果も高まったと考える。



講道館での学習の様子

実際に柔道の総本山である講道館で学習を積んだことで、日頃関わりが少ない武道の楽しさや伝統的な考え方を知ることができ、学校における保健体育の授業においても、日に日にその学習に取り組む意欲が高まっていった。

(3) 社会科「残したいもの・伝えたいこと」

本校中学部の社会科は中学部1～3年生を課題別に3班編成に組んだ縦割りグループで学習を行っている。本単元で嘉納治五郎を題材に、柔道の歴史について学習したグループは、障害が比較的に軽度の生徒で構成された5名である。授業時数は8時間で令和5年11月から12月にかけて実施された。

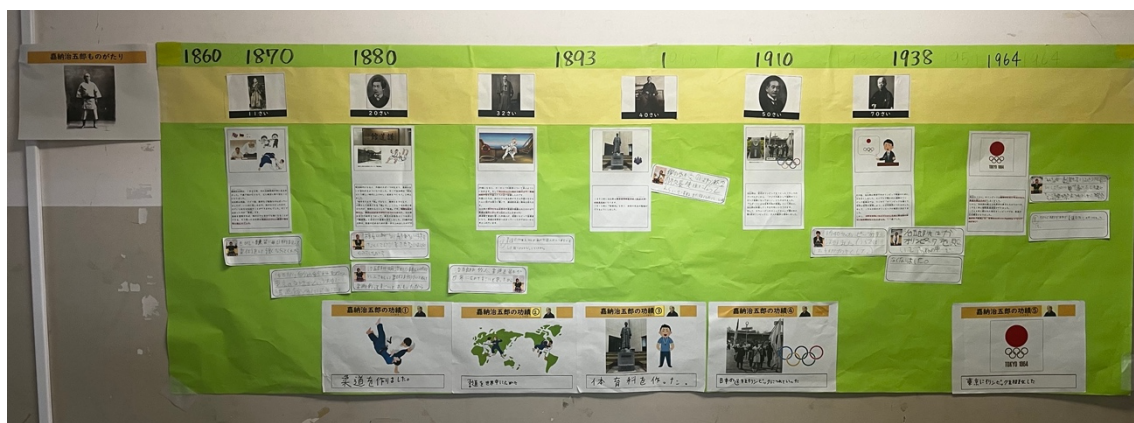
単元の目標としては嘉納治五郎の生い立ちや功績、遺した言葉等について調べ、年表や新聞等にまとめることで、柔道がどのように世界に広まっていったのかを知ること、嘉納治五郎について学んだことから、感じたことや考えたことを表現すること、の2点を掲げ、学習に取り組んだ。

授業の実施にあたっては柔道の歴史や広まりを知り、「だれが?」「どうやって?」「なぜ?」などの疑問符から考えた予想をもって、実際に講道館で見学したり、伝記を読んだりして理解が深まるようにした。その中ですごいと思ったところや驚いたところを見つけることで、偉人への尊敬の念がもてるようにし、読み取った伝記から嘉納治五郎の人生をまとめた新聞を作ることで、互いの感想を共有することができるようにした。

伝記については、知的障害のある生徒にわかるように内容を簡略化したものを教員が準備し、学習に取り組んだ。そこでは、柔道のことだけでなく嘉納治五郎が東京教育大学（筑波大学）の教育学部などの構成母体となった学校である東京高等師範学校の校長先生であったことを知り、より同氏についての親近感を増す生徒が増え、学習に意欲的に取り組んでいった。

単元中盤では保健体育科の校外学習とは別に、社会科の校外学習として実際に講道館にある柔道資料館に行き嘉納治五郎および柔道の歴史について調べ学習を行った。そこでは講道館の館長にお話を伺ったり、展示資料を見ながら「だれが?」「どうやって?」「なぜ?」というキーワードとして予想したり、比較したりしながら調べ学習を進めていった。その過程で嘉納治五郎の残した名言である「自他共栄」「克己」「なにくそ」という言葉を学習した。その中でも「なにくそ」という、負けてもあきらめない精神を表すキーワードとして生徒たちの印象に特に深く残った言葉であった。

まとめ学習では嘉納治五郎の年表とともに「ここがすごい!」をポイントにまとめた壁新聞を作成し、学習の成果として掲示をした。



壁新聞「嘉納治五郎ものがたり」

(3) 学校行事

「オリンピック選手と交流しよう 柔道 81 キログラム級 永瀬貴規選手」

交流・講演会は令和 5 年度 12 月 19 日に実施し、小学部、中学部、および一部の幼稚部

幼児児童生徒と保護者が参加し、非常に和やかな雰囲気の中で行われた（高等部は授業予定との重複のため不参加）。

本校の幼児児童生徒の障害の特性上、自ら情報にアクセスしたり行動に移したりすることが難しいことを踏まえ、保護者への参加を呼びかけた。保護者にも参加していただくことで、幼児児童生徒がパリオリンピックを観戦したり、交流する永瀬選手の情報にアクセスしたりするための支援を行っていただけることを期待した。

会の冒頭に社会科で調べてまとめた嘉納治五郎の年表を用いて学習の成果を発表し、永瀬選手に講評をいただいた。そこでは、永瀬選手自身も筑波大学出身であり現在も練習拠点としていることから、その内容について非常に親しみをもっていることや、日本で初めて開催された 1964 年に行われた東京オリンピック招致に、嘉納治五郎が尽力したことなどをよく調べてまとめていると評価をいただいた。

交流では柔道の受け身や投げ技の指導をしていただいたのちに、中学部の生徒が中心となって永瀬選手とタグ柔道で対決をして、お互いの交流を深めた。また小学部児童もタグ柔道を体験し、その際には中学部の生徒がやり方を教えるなど、学部間を超えた交流を行う様子も見られた。

講演では夢に向かって努力し続けることの大切さや、自身を支えてくださっている方への感謝を忘れないことなどを、幼児児童生徒にもわかりやすく平易な言葉を用いてお話いただいた。



永瀬貴規選手

3. 成果と課題

本年度は中学部を中心としてオリンピック・パラリンピック教育を行った。オリンピックとの交流・講演会は全校に呼びかけを行いコロナ禍ではできなかった、大きな集団でのダイナミックな学習機会をもつことができた。

一連の学習を通して生徒たちの柔道への関心がより高まり、交流・講演会のみでの参加であった小学部の児童も中学部で行っているタグ柔道の楽しさを感じることができた。また、交流・講演会後には永瀬選手と一緒に給食をとりながら、永瀬選手の経験に基づく感謝の気持ちや夢についての話をより深く聞くことができ、パリ五輪でもメダルを取ってきて、再び訪問してくれることを約束してくださった。生徒たちは永瀬選手との交流をとっても喜び、家庭でもパリオリンピックのことや柔道のこと、永瀬選手のことについて家族と話をすることが保護者からの連絡帳を通じて報告された。また、小学部の保護者からは、「児童はあまりオリンピックのことについて理解していないようだが、学級通信などに載っている永瀬選手の写真をパリオリンピックが始まるまでとっておいて、一緒にテレビで応援をします」といった声が寄せられた。

中学部においては一連の学習を通して、タグ柔道だけではなく柔道に対する興味関心も高まり、休み時間などに掲示されている嘉納治五郎の年表を見ながらパリオリンピックでの永瀬選手の活躍について、その期待感を話す様子が見られるなど、教科横断的に行った学習の内容がしっかりと身につけている様子が伺えた。また、柔道の精神や礼儀作法の学習を通して、学校生活においても礼儀を大切にしようという姿も見られるようになった。さらに、一連の学習機会の中で学んだ「なにくそ」という言葉を合言葉として、タグ柔道の試合の中で負けることがあっても、悔しがって泣いたりせずに気持ちを切り替えることができるようになったり、すぐにあきらめないで粘り強く物事に取り組むようになったりする生徒が増えるなど、生徒の学習に取り組む姿勢に大きな変化が見られた。

以上のことから、本取り組みに関してはその目標を達成できたと考える。しかし、取り組みが終了してから数ヶ月が経ち、今年行われるパリオリンピックまでに高まった興味関心を持続させるための継続した取り組みをどのように行っていくか、今後の課題であると考えます。

障害のある生徒のスポーツ活動の参画に向けた実践

附属桐が丘特別支援学校 寒河江 核

1. 対象と目標（ねらい）

肢体不自由特別支援学校である当校では、小学部から高等部までの児童生徒を対象に体育・保健体育の授業や交流学习などにおける運動・スポーツ活動に取り組んでいる。パラリンピック競技大会における種目である車いすバスケットボールやボッチャについても授業でも取り上げる他、学外でも体験会や競技に親しむ児童生徒の姿がある。一方で当校に在籍する中学生及び高校生を対象に行った2023 スポーツライフにおける調査の中で、「過去一年間に学外でのスポーツ実施をしなかった」割合は42.9%であった。笹川スポーツ財団が実施した「スポーツライフに関する調査（スポーツライフ・データ）」において青少年の運動スポーツ実施レベルは、高頻度・高強度の実施者よりも、非実施・低頻度の実施者の割合が年々増加していると報告されている。

当校の体育・保健体育の授業においては、障害特性に合わせた指導の工夫や教材の設定を行い、種目を通じて学びを展開しているが、学外や卒後の運動スポーツ活動の充実のために、障害に応じた運動・スポーツへの参加に向けて、その基盤を培うことをねらいとし、本実践に取り組んだ。

2. 内容

対 象：高等部1年生（12名）

指導する教科・科目：体育及び総合的な探求の時間

単 元 名：「ユニバーサルスポーツで交流しよう」

単 元 の 概 要：体育の授業内で「ユニバーサルスポーツ」を考案し、附属坂戸高校との交流学习時に活動の一つとして取り組んだ。個々の発達段階や個別の指導計画に基づく課題を考慮し、2人組のペアで企画準備を進めた。
(表1)

表1 グルーピングと活動内容

生 徒	内 容
A、B	概要班：ユニバーサルスポーツの概要についてまとめる
C、D	評価班：考案したユニバーサルスポーツの評価基準を作成する（表2）
E、F	企画班①：「風船バドミントン」
G、H	企画班②：「風船 de 大名行列」
I、J	企画班③：「ランダムパルーンテニス！」
K、L	企画班④：「キッチン卓球バレー」

「ユニバーサルスポーツ」の概要について担当がまとめたものに対して、障害をもつ当事者として必要なルールや参加方法の工夫について意見を出し合い、企画立案に向けて必要な共通理解を図った。その後は、企画班がそれぞれ考案したユニバーサルスポーツを提案、実施し、評価班の作成した評価基準に沿って実施評価を行った。（図1）

表2 「ユニバーサルスポーツ評価項目」

評 価 項 目	
企画評価	楽しさ
	分かりやすさ
	充実度 説明：楽しさ×活動量×競技性の総合評価
	ゲーム性
	独自性 説明：オリジナリティ
	ルールの明確さ
運動評価	活動量
	安全性
	用具・道具
	汎用性 説明：年齢、障害、国籍を問わず誰もができるようになっているか。
	競技性
	体験したユニバーサルスポーツについて良かった点、改善点、感じたこと等を記述してください。

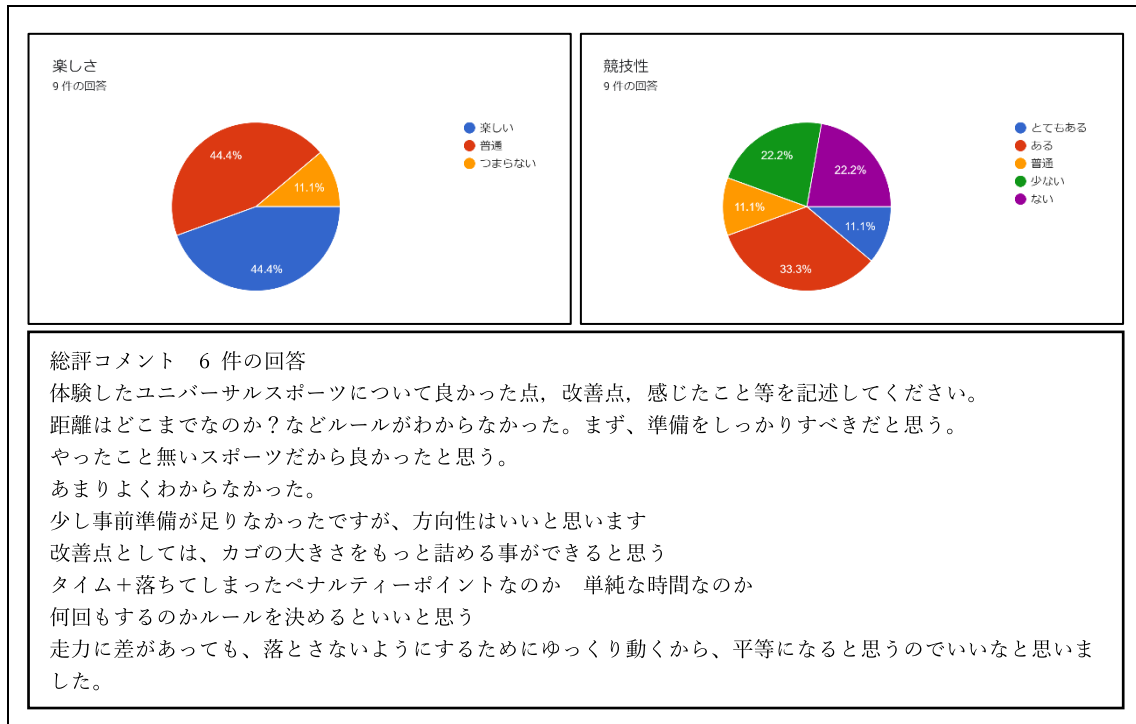


図1 「ユニバーサルスポーツ評価 結果抜粋」

それぞれの企画評価の中では、評価班が作成した評価基準に沿った観点別評価とともに総評コメントを基にし、附属坂戸高校との交流時に実施するユニバーサルスポーツを選定した。合意形成のプロセスでは、「ボールの大きさを替えると競技性が上がるではないか」、「ユニバーサルスポーツの視点で考案され参加者が楽しめる内容だった」といった意見があった。(写真1)

企画内容決定後は附属坂戸高校との交流に向けて、主担当を中心としながらも、より良いユニバーサルスポーツとなるよう協働的に活動する様子が見られた。(写真2)



写真1 企画評価の様子



写真2 企画のブラッシュアップに取り組む様子

企画内容決定後は附属坂戸高校との交流に向けて、主担当を中心としながら、より良いユニバーサルスポーツとなるよう協働的に活動する様子が見られた。(写真2)

交流当時は「風船 de 大名行列」という名称で、台に載せた風船を落とさないで4人（立位2人、車椅子2人。そのうち1人は目かくし）で運ぶスポーツを実施した。事後に評価班が作成したアンケートを参加生徒した生徒に対して行い、学習のまとめの中で活用した。

3. 成果と課題

本実践では、集団の中では自分の考えを表現することをためらったり、自分の考えをもつことに難しさが見られたりする生徒がいる学習集団の実態より、ペア学習から段階的に集団での協働的な学びへ活動を展開した。運動・スポーツの好きな生徒から、積極的には運動・スポーツを実施することが少ない生徒がいる中でのユニバーサルスポーツの企画立案に向けた合意形成のプロセスでは、それぞれの視点で積極的な発言が見られた。また、自分たちだけの活動で終わることなく、同世代の仲間との交流を単元の最終に位置付けることで、企画立案時に学習集団として一体感を持ちながら展開できた要因とも考えられる。一方、コウ流当日の場面では、通常では経験することが少ない大人数の中での指示や実施に緊張してしまい、準備していたことを十分に発揮できない様子も見られ、企画遂行能力に課題が挙げられた。

4. 今後に向けて

当校に在籍する児童生徒は、在学中の運動・スポーツを「する」ことを中心に「見る・支える・知る」といった多様な価値を体育・保健体育の授業の中で学んでいる。これまでの体育の授業で学びを本実践の中では、企画立案の活動を通して多面的に捉えなおすことで、スポーツへの多様な関わり方の一端に気づき、考え、表現しようとする姿が各場面で見られた。障害を持ちながら運動スポーツ活動に取り組む際には、周囲の関わりや環境の設定も必要ではあるが、当事者が自己の身体状況を理解することに加え、どのようなルールや用具の工夫があると既存の活動に参加することができるかといったアダプテッドの視点も重要となってくる。保健体育科が目指す豊かなスポーツライフの実現に向けて、アダプテッドの視点をもちながら運動・スポーツに親しむことができるような授業展開や教科横断的な指導を今後も展開していきたいと考える。

オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高めるための取組

附属久里浜特別支援学校 遠藤 佑一

1. はじめに

知的障害と自閉症を併せ有している幼児・児童が通う本校では、学習活動を計画する際に、障害特性を念頭に置いた工夫を取り入れることがとても大切である。特に子供たちの興味・関心や「分かる、知っている」ことを取り入れていくことは特性に配慮した重要な要素の一つとなっている。そこで、それらを踏まえ、来年度に迫るパリ 2024 オリンピック・パラリンピックに向けて大会をより身近に感じてもらえるように、今年度本校で行った取組みの一例について紹介する。

2. 取組みの実際

(1) 大会マスコットキャラクターに着目した取組

東京 2020 大会が行われた際には、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が主催したマスコットキャラクターを選ぶ投票に本校も参加し、マスコットキャラクターに触れる機会を十分にもつことができた。そして、その後行われたオリンピック・パラリンピック競技大会の期間中、家庭からは普段あまりスポーツ中継を見ない子供が家で流れるテレビ中継を眺めていたという話が多数挙がっていた。もちろん、大会期間中は普段放送されている内容が変更となり大会中継が多くあったということも考えられたが、実際に中継されている映像の多くにマスコットキャラクターが多く映されていたことから、子供たちが「知っている」物があったということも要因の一つとなっていたのではないかと仮説を立てた。実際に、自閉症の子供たちの中には人への興味・関心は低いが、人形に対しては高い興味・関心をもっているという子供が多い。そこで、パリ 2024 大会においても、マスコットキャラクターである「Phryge (フリージュ)」を媒介として、オリンピック・パラリンピックに興味・関心をもってもらいたいと考えた。

(2) 第 19 回アジア競技大会に関連付けた取組

アジア競技大会もオリンピック・パラリンピック同様に 4 年に一度開催されている国際的なスポーツ大会である。第 19 回アジア競技大会は当初 2022 年 5 月より中国浙江省の杭州市を中心に、寧波市、紹興市、湖州市の一部で行われる予定だったが、新型コロナウイルス感染症の流行により、1 年後の 2023 年 9 月から開催された。

本校は 2011 年度より中国浙江省の寧波市達敏学校と姉妹校協定を結び、交流を行ってきた（コロナ禍により 2021 年で一度協定が終結し、2023 年に再締結）。アジア大会が達敏学校のある寧波市でも行われることから、達敏学校からの呼び掛けがあり、アジア競技大会をテーマとした交流を行うこととなった。アジア競技大会においても大会マスコットキャラクターが設定されており、スポーツの国際大会という点、マスコットキャラクターがいるという点を共通項に持つことを核としてオリンピック・パラリンピックと関連付けて子供たちに紹介し、交流を行った。交流に向け、初めに本校の玄関にアジア大会やパリ大会のマスコットを設置し、子供たちにマスコットに親しみをもてるようにした。その上で交流当日は達敏学校とオンラインでつなぎ、競技に関するクイズや、フリースロー対決、ダンスの交歓などを行った。クイズでは 2022 年アジア競技大会組織委員会公式ウェブ



写真 1. 大会マスコット
(上：パリ大会、下：アジア大会)



写真 2. 玄関に設置された大会マスコットに注目する児童



写真3. 達敏学校との交流の様子

ウェブサイトに掲載されていた、マスコットキャラクターが競技を行っているイラストを活用しながら競技大会とマスコットの結びつきがより印象付けられるように工夫した。

3. おわりに

本校の子供たちがマスコットキャラクターを媒介として、アジア競技大会やオリンピック・パラリンピックへの興味・関心が高まることを期待しながら本取り組みを行ってきた。アジア競技大会期間中には同じく玄関にメダル獲得数の速報も掲示しながら、大会への関心を高める工夫も行った。これらの学習後には複数の家庭から、アジア競技大会においてもテレビ中継を見ながら応援していたという声を聞くことができた。また、アジア競技大会期間中に校外学習で行った食事処のテレビに、大会の中継が放送されており、その中に出てきたマスコットキャラクターを見付け、「僕これ知ってる！」と言って映像に関心を向けていたという報告も聞かれた。アジア大会終了後もパリ大会のマスコットは引き続き設置しており、登校時に毎回マスコットに触れて少し遊んでから教室に移動する児童がいるなど、着実に子供たちの身近な存在として認識されつつある。一方で、結果速報の掲示については、日々更新をしても、注目している子供がほとんどいなかったため、パリ大会に向けて改善をしていきたい。



写真4. パリ大会のマスコットに興味を示す児童

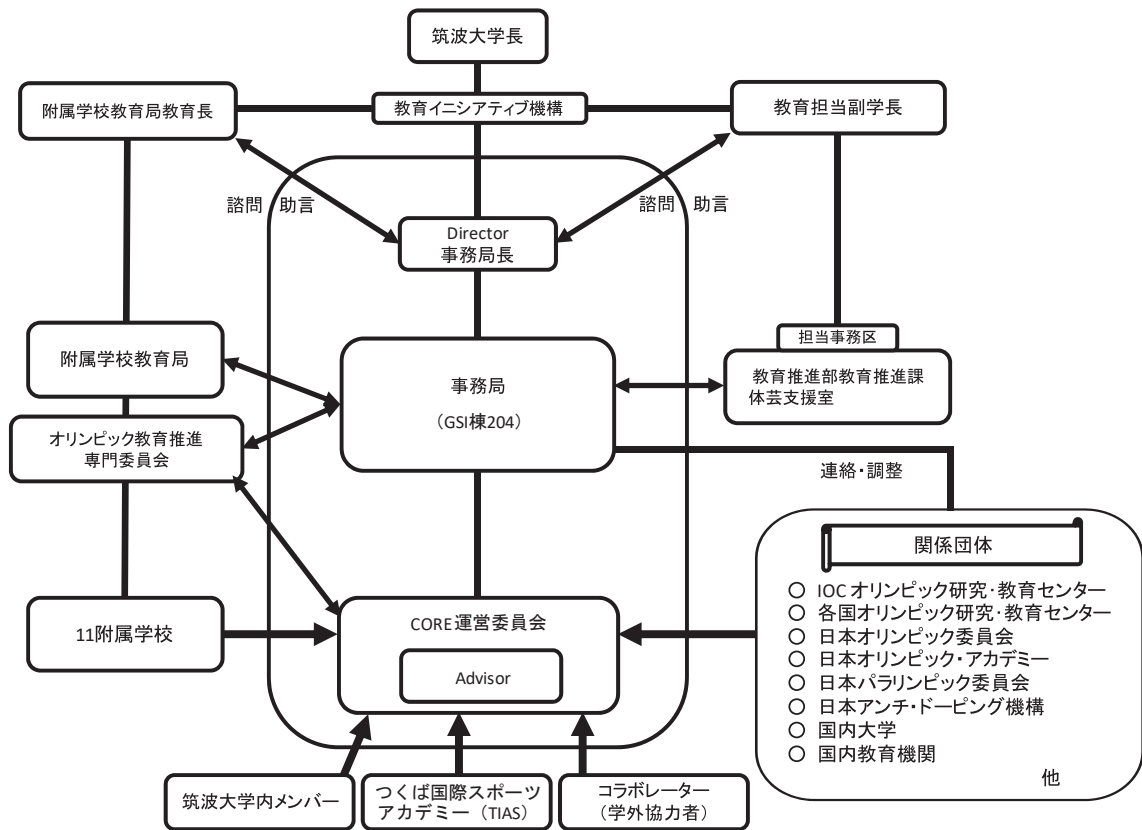


写真5. メダルの速報掲示

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（令和5年度）

委員長	香海 沙織	附属学校教育局教育長
副委員長	青木 隆一	附属視覚特別支援学校長
	雷坂 浩之	附属学校教育局次長
	梶山 正明	附属学校教育局教育長補佐
	江上いずみ	客員教授
	真田 久	特命教授
	齊藤まゆみ	体育系教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	澤江 幸則	体育系准教授
	大林 太朗	体育系助教
	森本 隆史	附属小学校教諭
	秋山 和輝	附属中学校教諭
	鮫島 康太	附属高等学校教諭
	横尾 智治	附属駒場中・高等学校主幹教諭
	野村 拓也	附属坂戸高等学校教諭
	山本 夏幹	附属視覚特別支援学校教諭
	荒川 郁朗	附属聴覚特別支援学校教諭
	宇佐美太郎	附属大塚特別支援学校教諭
	田丸 秋穂	附属桐が丘特別支援学校副校長
	遠藤 佑一	附属久里浜特別支援学校教諭
オブザーバー	BENTON Caroline F.	学長補佐
	中塚 義実	附属高等学校教諭

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



オリンピック教育 vol.12 2023/04-2024/03

2024年6月発行

発行者 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所 オリンピック教育プラットフォーム (CORE) 事務局
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 GSI 棟 204
事務局長 真田久
